

# 災害時の情報収集へ

## 大樹 神戸大が飛行船実験

【大樹】神戸大工学部機械工学科の深尾隆則教授や学生による飛行船(全長12㍎)の実験が町多目的航空公園で行われている。同飛行船はカメラなどを搭載し、上空から災害時の情報収集をすることが目的。屋外での飛行実験は今回が初めてで、9月5日まで滞在する予定。

(松村智裕)

神戸大は阪神・淡路大震災(1995年)以降、災害時の救助活動を支援する機器の開発が盛ん。無人飛行船に全球測位システム(GPS)や風速センサー、慣性航行ユニットなどを搭載し、災害地などを決められたルートで自律飛行を目指す。

深尾助教授と学生4人は7日に来町。2004年度まで同公園で全長68㍎の飛行船による実験を繰り返していた独立行政

町多目的航空公園で実験が行われている神戸大の深尾助教授や学生らによる飛行船



法人・宇宙航空研究開発機構(JAXA、東京)の関係者が実験に協力し、JAXAの飛行船格納庫も活用している。

8日は飛行船にヘリウムを入れ、手動操縦による初の屋外飛行を実施。約20㍎上昇させ、飛行特性を確認した。当面は手動による飛行実験を行い、21日以降に自律飛行の実験へ移行する予定。この飛行船は上空30㍎を1時間ほど飛ばすことが可能。飛行船は飛行機やヘリコプターに比べ、低空飛行できる利点もある。深尾助教授は「風が強くても経路を乱さず飛ばすことが課題」とし、「予備面で折りがつかず、5年後の実用化を目指したい」と話している。